

新人時代のテレビ局 はどのような様子で したか？

私がフジテレビに就職したのは1985年。男女雇用機会均等法が成立した年で、今ならあり得ない職場ルールがまだたくさん残っていました。

例えば、新人女性アナウンサーが最初に覚えることは、先輩男性アナウンサーのお茶の好み。Aさんはコーヒープラック、Bさんは紅茶に砂糖2つといったリストを渡され、本人に聞くことなく好みのお茶を出せるようになることが大切な役割でした。一般商社に勤める夫に聞くと、すでに当時から「お茶は飲みたい人が自分で入れるシステムになっていたため、「テレビ局は遅れているね」と呆れられたりしました(笑)。

最近では、メディアでの男女の描かれ方がたびたび問題になりますよね。テレビにしろ新聞、広告にしろ、メディアは見ている方にとっても大きな影響を与えるもの。いくら表面的に男女平等、働き方改革などといっても、まずメディア側からこうした古い体質を変えていかなければ、社会を変える機運にはつながらないと私



は思っています。もちろん、確実に変わってきてはいるんですよ。でも、まだまだかなと感じることが多いです。

報道キャスターを 志したきっかけは？

新人時代、日航ジャンボ機の墜落事故が起きました。その翌日、これから報道特番をオンエアしようという5分前に、現場から送られてきた映像に生存者が映っていたんです。ニュース原稿は生存者が発見される前のもので、現場からの映像にはなんのレポートもついてない。スタジオが騒然とする中、そのままオンエアに突入してしまいました。ところが、番組を担当していた露木茂さんは、用意されていた原稿をゴミ箱に捨て、「生存者が発見されました」と落ち着いた様子で切り出したんです。情報が入ってくるまでの間、露木さんは航空評論家と話をつなぎながら、原稿ゼロの状態で番組を進行しました。一部始終をカメラの横で見ていた私は、その様子に衝撃をうけたんですね。「こんな仕事ができたら、どれだけやりがいがあるんだろう」と感動し、以来、ずっと報道志望です。番組終了後、露木さんが言ってくれた「長野、報道というのは今起きている一番新しい事実を伝えることなんだよ」という言葉も、ずっと記憶に残っています。

視聴者側の私たちが メディアに触れる際 気をつけることは？

テレビや雑誌、新聞に限らず、インターネット、SNSなど、現代のメディアは実に多様になってきています。そんな中で視聴者側の立場である皆さんに身につけてほしいのは、いわゆる「メディアリテラシー」。

民放のテレビにはスポンサーがついているので、番組にもその意向やメッセージがある程度含まれています。一方で、ウェブメディアは小さな声を拡散することができるけれど、フェイク(偽)の情報が混じっていることもある。そういったメディアそれぞれの特性を踏まえて、情報を取捨選択できるようになれたらいいですね。少し面倒ですが、「新聞ではこういう情報も出て、SNSではこういう情報も出て、だから、もう少し自分でも調べてみよう」といった行動を意識して取るようにすると、自分なりの判断基準が育ちます。

あらゆる考えや価値観が耳や目に入ってくる時代、流れてくる情報を鵜呑みにしているだけでは、偏った考えにいつの間にか影響されてしまうこともあるでしょう。私は、国語の授業で本の読み方を教わるように、学校教育の中で子どもたちからメディアリテラシーが学べる機会が増えるといいなと思っています。

長野さんのリーダー シップスタイルとは？

現在、テレビで報道番組を持たせていただいている一方、「ハフポスト」というネットのニュースメディアでも編集主幹をしています。タイプの違う複数のメディアに関わっていると、こちらでできないことをあちらでやるなど、働き方も使い分けることができるので、本当に楽しく、やりがいも感じています。

後輩世代と仕事をする中で気をつけているのは、相手の話をよく聞くということ。若い人にはのびのびと働いて力を発揮してもらいたいです。よほどリスクが高いことではなければ、「やってみなよ」と背中を押すようにしています。また、「苦しいときほど笑っていきましょう」ということも意識していますね。大変なときほど笑顔で「楽しくやろうよ」と。どんなときでも客観性を失わず、決して感情的にならないことが、中心にいる人間の取るべき立場だと思っています。50代になりましたが、これからもずっと報道の現場に携わってきたいですね。いつか、ホワイトハウスでアメリカの大統領にインタビューをするのが、夢なんです。

